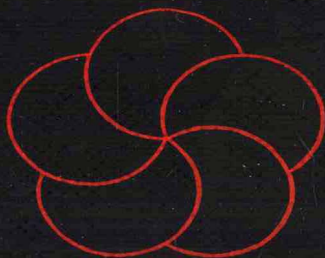
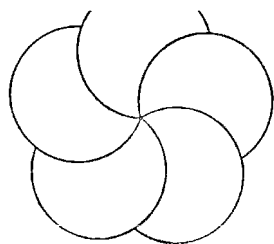


11

日本文学の歴史



人間賛歌



11 人間賛歌

日本文学の歴史

稲垣達郎 下村富士男 編



日本文学の歴史 (全12巻)

第11巻 人間賛歌

昭和43年3月20日 初版発行

定価 650 円

編 者 稲 垣 達 郎
下 村 富 士 男
発行者 角 川 源 義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見2-13
振替東京195208番
電話東京(265) 7111番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

大正の開幕

大帝崩御 暗い不安 將軍の死 冬の時代をこえて 憲政擁護・閥族打破 新聞社を襲撃
渦巻く政変 大戦の勃発 飛行機が飛ぶ

九

伸びゆく白樺

貴公子の群れ ある朝の出来事 自分が人間である 第二・第三の核 十年後を見よ 十
人十色 ロダンの彫刻を捧持して 自我の守護者 友達耽溺 天才賛美 お山の大将意識
エリートへの承譜 「白樺」の展開 人道主義時代 「小説家の小さん」里見弴 「白樺」後
期の実体 「白樺」の異端者 『或る女』 白樺山脈

二六

実篤と直哉

わがままな落第生 喧嘩の参謀 友情の告白 失恋とトルストイ 父との不和 青春の憂
鬱 生命の鼓動 新進作家 父の家を出る お目出たき人 暗夜を行く 筆は進まず
我孫子の生活 小説の神様 日向の国へ 新しき村の運動 美と愛への道

二〇

インテリゲンチヤの登場

木曜日の夜 ケーベル先生 朝日文芸欄 師弟愛 影と声 哲学の流行 哲学叢書

三

『三太郎の日記』

人格主義

詩人への夢

古寺巡礼

伝統文化への回帰

第一次大戦とデモクラシー

一二四

恐慌から好況へ 開けゆく村々 新しい思想の胎動 デモクラシーのリーダー 南明倶楽部
での興奮 排日運動 反革命の動き シベリアの野に 米騒動 平民宰相の登場 帝国
主義への道 朝鮮独立運動 百合子の目ざめ 貧乏物語 続発するストライキ 知識人の
回心

第四階級の誕生

一二三

売文社看板をあげる 売文社茶話会風景 復活の呼び子 素朴で力強く 労働文学の産ぶ声
彗星のごとく 民衆芸術論 改造ムード 第三の労働作家 第四階級の文学へ

リアリズムの終焉

一二六

海へのがれて ひとつの転機 新しさと古さと 時は過ぎゆく 再び草の野に 故国に帰
りて 春を待ちつつ 偉大なる馬鹿 煩悩の煉獄 生まざりしならば 風雪に耐えて
大いなる終焉 自然主義の荘厳

苦悩する近代

一二五

運命の道 風と月と 傍観者の利己主義 戯作三昧 父の死 螢草 無名の人 恩讐
をこえて 芸術の使徒 知己の友 鶴は病みき 冷やかなる決別

童心の発見

三六

「赤い鳥」の名つけ親　　すず伝説　　パンのために　　大きな遺産　　「一房の葡萄」　　「お伽
嘶」から「童話」へ　　子どもの代弁者　　「近代」を追って　　先駆的な「愛子叢書」　　猿まね
雑誌　　オの字童話　　小市民性と童心主義　　華宵事件

新しきうたびと

三四三

牛飼歌人　　アララギ派と太正短歌　　結社の命長く歌人の命短し　　歌壇の歌人の誕生　　わが道
くらし　　一本道　　トンカジヨンの転換　　内部の批判者　　赤彦のゆくえ　　写生説への道
さまざまの人々　　悲しき歡喜　　ストインズムの文学　　日光とともに我等在らむ　　歌の涅槃那

近代詩の展開

二七六

はなやかな登場　　先導者白秋　　浪漫的交友　　叙情小曲の形成　　叙情の復活　　詩の革命
人道的詩人　　「白樺」の詩人　　生活の愛　　生の芸術　　人道的詩風の終末　　民衆派　　重庄
のなかで　　詩は詩である　　変革の嵐　　成熟と発展　　新しき叙情　　三つの支柱

犀星と朔太郎

三〇八

脅迫状　　流離の旅人　　運命の邂逅　　金沢の旅　　ハイカラ詩人と書生詩人　　「卓上噴水」時
代　　「善」の詩人「悪」の詩人　　虹をつくるひと　　宴のあと

芸術と実生活のあいだ

三八

かえらざる夢 哀しき父 子をつれて 自虐と被虐 心暗き日々 憂鬱な自伝 「歳の
中」物語 つくられた「私」 私小説・心境小説 破滅への道 惑乱のなかに 調和の美
極北に立つ

関東大震災

文士、逃げ出す 地獄の叫喚 ババママ文化への天罰か 解放を求める恋愛の選手たち サ
ラリマンの夢 イデオロギーのマーケティング 「キング」「円本」大衆をつかむ 大衆と芸術
のあいだ モダン・ガールの出現 大衆娯楽をつくるもの 女の要求と子どもの夢と

廃墟に芽ぶくもの

災厄の中から 先駆的な人々 セメントで絵を描く 絶望のガス体 不安と恐怖 頭なら
びに腹 新感覚派の誕生 閻将横光飢えにたえて 文学革新の情熱 分裂する左右 双壁
のもうひとり 青春の叙情 「コラキョウ」 目ざめたプロレタリア文学 飯場にいた葉
山 木曾から東京へ

大衆の広場へ

猿飛佐助の誕生 「立川文庫」の魅力 「大菩薩峠」の世界 虚無と反骨 大衆文学の成り
立ち 四つの年輪 災禍の中につつ 「おもしろさ」をつくる 大宣伝作戦 吉川英治の
構想力 かんかん虫 愛される天狗 直木の辻斬り論法 大河小説の書き手 股旅小説の
土壌 捕物帖今昔 推理小説の開花

特集・文学散歩

『暗夜行路』の旅

六

旅行文学

直哉の旧居

賀茂川の窓

衣笠山のふもと

山上の夜明け

大山への道

茂吉の文学と風土

二七〇

みちのく山

ふるさとの道

北方的暗鬱性

あららぎの樹下

「白き山」の世界

江河大

自在

『大菩薩峠』地誌抄

二〇〇

大菩薩峠記念館

大菩薩峠

御岳神社

三輪明神

竜神温泉

間の山

白骨温泉

参考文献

二三三

日本文学年表

二三四

あとがき

二三四

本巻執筆者（五十音順）

足立 卷一 伊藤 信吉 稻垣 達郎 榎本 隆司
 遠藤 祐 尾崎 秀樹 小田 切進 鹿野 政直
 上 笙一郎 川口 朗 紅野 敏郎 高木 健夫
 鳥越 信 本林 勝夫

本巻協力者

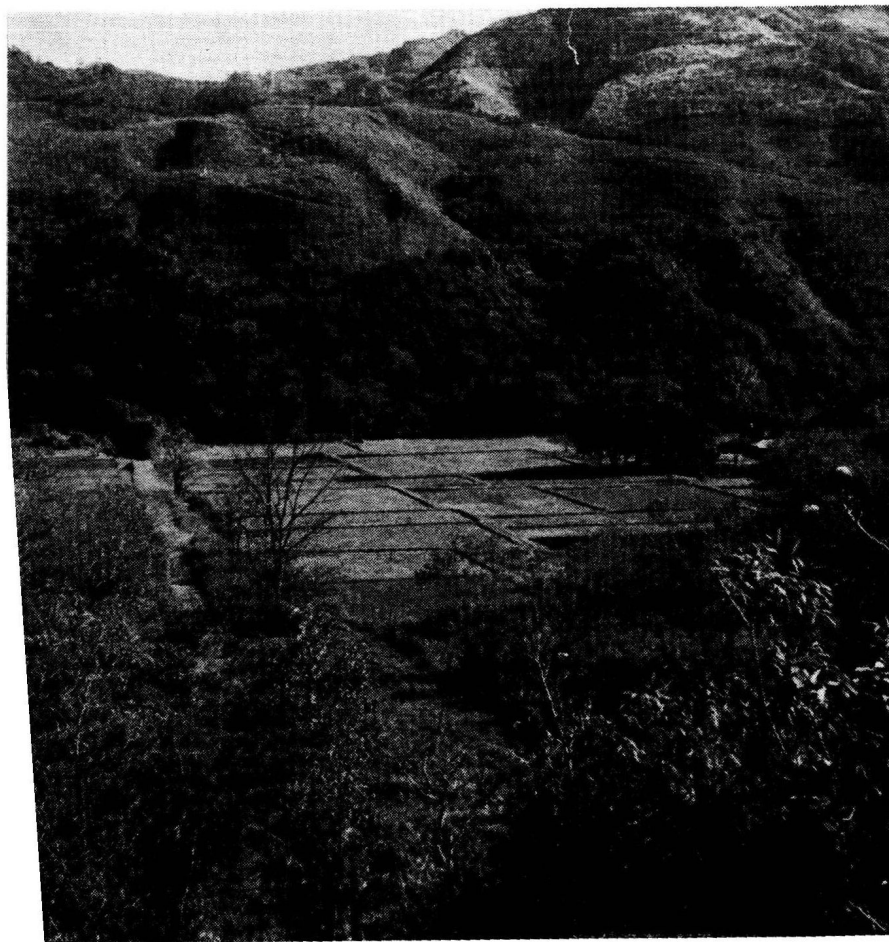
池田 蘭子 大竹 新助 川副 国基 河野 利明 小玉 光雄
 坂上 博一 東海林 隆 東郷 克美 永塚 功 日高 英嗣
 藤村 道生 堀江 文人 横井 保平
 演劇教育研究所 共同通信 近代史研究会 講談社 国立国会図書館 山
 陽放送サービス 人物往来社 新村堂 世界文化社 日本近代文学館 日
 本交通公社 日比谷図書館 早稲田大学演劇博物館 早稲田大学図書館

写真特集

叙情の画家 竹久夢二
 絵に見る風俗
 作家の原稿
 米騒動
 漫画に見る政治
 大正洋画壇の若き個性たち
 建築物
 築地小劇場
 歌碑行
 大正文学の面影
 戸外へ、郊外へ
 関東大震災

人間賛歌

宮崎県日向の「新しき村」



大正の開幕

大帝崩御

暑い夏の盛りであった。天皇の病室には、十五疊敷の日本間があてられていたが、

気温を少しでも下げるため、扇風機がおかれ、氷塊が並べられた。そのほかすだれや岐阜提灯、風鈴などが、夏の装飾として配置されたが、室内のおもむきはいかにも古風であった。天皇の好みで電灯はいっさい用いられず、室内の灯火はことごとく蠟燭の行灯を用い、廊下や縁側の照明には、土器に種油灯心が用いられた。

室内の装飾が古風であったように、宮中のしきたりはすべて古風であった。医学界にその名をうたわれた青山胤通・三浦謹之助のふたりが診察するまで、伝統にとらわれた侍医たちは、天皇の病名さえ決定することができなかった。ひとりの看護婦も天皇につけられ

ず、無経験な女官がその代わりをつとめた。勲五等以上の者でなければ宮中にはいることができないのに、勲七等以下の看護婦しかいなかったからである。

こうした古風な環境のなかで、明治天皇は、七月二十九日午後十時四十分崩御された。踐祚の式の時間がないため、死去は三十日午前零時四十三分と発表された。それより一年間、新聞は喪に服して、紙面は黒わくで囲まれることとなった。

七月二十日、官報によって天皇の重態が発表されると、株式市場は恐慌相場を現出した。「中外商業新報」は、「我が国家の現状を信じ、経済界の前途を想へば、市人は須らく冷静ならざるべからず。殊に御回復の望みなきにあらざれば、売買者たるもの大に謹慎ならざ



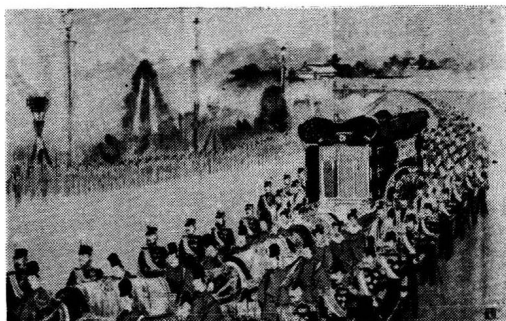
竹久夢二画、吉井勇
『紙園双紙』表紙

るべからず」と論じた。「御回復の望みなきにあらざれば」といういいまわしに、天皇が絶望状態にあると国民から思われたことが察せられる。病状を案じる人は、皇居前に集まり、夜にはいっても天皇の平癒を祈りつづけた。

暗い不安

明治四十五年（一九一二）という年は、思いうけぬ事件の突発する年であった。

隣国の中国は、この年の二月から共和国となり、元



明治への告別 天皇の病気が発表されて以来、人々は新聞号外の病状報告に一喜一憂し、また、宮城前につめかけて平癒を祈ったかいもなく、7月30日午前0時43分ついに崩御。大葬の葬列は莊嚴をきわめた。道筋を埋めた群衆は悲しみと新しい時代への不安との入りまじった気持で列を見送った。それはそのまま古い明治との決別の列であった。

号を中華民國元年と変えていた。その前の年つまり辛亥の年の秋十月に、武昌で革命軍が蜂起すると、三年近く続いた清朝はあっけなく倒れ、民国すなわち共和政体の国家となった。孫文が臨時大統領になったと思うと、一か月半で辞任し、そのあとを軍閥の袁世凱がおそった。列強は、それぞれの立場で中国革命への干渉の機会をねらっていた。清朝という異民族支配こそ廃止されたが、中国革命の前途は多難であるようにみえた。

そこへ突発した明治天皇の死である。隣国のあわただしい動きをあれよあれよとみまもっていた国民は、ふたたびその関心を国内へひき戻された。これから日本はどうなるのであろうという思いは、だれの胸にもあった。そうした不安に追いつちをかけるように、タイムズ紙は、「日本は、天皇の死を境目として下り坂に向かうであろう」と報じ、それが日本でも紹介された。同盟国であるイギリス、同じ海洋国のイギリスから、不幸のさなかに冷水を浴びせられたような感を、日本人はもった。

そうして一面では、タイムズの評価に反感をもつと

ともに、他面ではいっそう心細くもなった。天皇の病氣を知って多くの国民が宮城前につめかけたのは、一つには「英主」をしたう気持からであったが、いま一つには彼らの生活に迫ってくる不安感からのことでもあった。

新しい天皇は、からだが弱く統治者として心もとない印象を多くの人々に与えていた。特に先帝と比較したばあい、その印象は深かった。

天皇が死んで、明治時代は、どのような決算書を国民の前に残したのだろうか。

日清・日露の兩戦役を経て、日本はいまや極東の強国となっていた。安政五年（一八五八）の五か国条約以来、久しく苦しんできた不平等条約は、明治三十二年（一八九九）の治外法権の撤廃につづき、四十四年（一九一〇）には関税自主権の回復があつて、もう過去のものとなつていた。そればかりでなく、台湾、南樺太、朝鮮を植民地とし、アジア大陸に利権をもつて、列強の一員となつていた。かつての被圧迫国は圧迫国に転化していた。

しかもそのような国家の「栄光」のもとで、国家自

体は、じつは破産にひんしていたのである。歳出せいで四億円程度の財政規模であつたころ、十七億一千六百万円の臨時軍事費をついやして戦われた日露戦争は、戦後の日本を極度の財政困難に追い込んでいた。

戦費の財源は内外の戦時公債に求められ、外債は八億円にのぼつた。その償還の期限がくると、償還のための外債を新しくつものらねばならないほどであつた。当然、国内では増税につぐ増税が行なわれ、しかも戦時中の臨時税はそのまま戦後にまで延長された。ひとりあたりの租税負担額は、明治四十五年には、日露開戦の前年の二倍近い九円十二錢七厘にのぼつた。農家一戸あたり平均百円の負債をもつといわれた。

明治という時代が示した決算書の外観と内実は、なんと異なつていたことだろうか。そしてそのくい違いを、見のがさない人々も少なくなかつた。

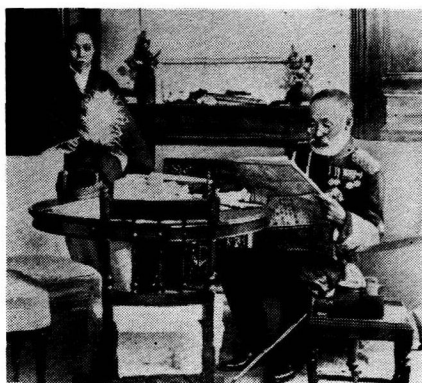
夏目漱石もそのひとりであつた。日露戦後の「大國」日本のイリュージョンのなかで、「牛と競走をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ」と言い放つた漱石は、われわれは沢庵のしっぽをかじつて正宗の名刀を買うべく、あくせくしているようなものとの感

想を、明治四十四年に述べている（『マードック先生の日本歴史』）。

しかもその漱石にして、やはり明治天皇の死には深い衝撃を受け、「明治がなくなったのは御同様何だか心細く」ともらさないではいられなかった（大正元年八月八日付森次太郎あて書翰）。

將軍の死

人心に深い衝撃を与えた明治天皇の死から、一か月半が過ぎて、九月十三日は御大葬の日であった。その日の情景の探訪を命じられた新聞記者の生方敏郎が、銀座から馬場先門、桜田門、



自刃当日の乃木夫妻 改元して大正元年になった9月13日、大葬の靈柩が宮城を出る午後8時の号砲とともに夫妻は自刃した。「自分はこの度御跡を追ひ奉り自殺候段恐入り候儀その罪輕からずと存じ候云々」という遺書を残して。その日乃木はわざわざこの写真を撮らせた。芥川龍之介は『將軍』の中で「写真をとつたのはわかりません」と動機の不純を指摘した。

日比谷公園、警視庁や二重橋前などをひとわたりめぐり、近衛兵に守られた鹵簿を見送って社に帰ったのは、夜もかなりふけたころであった。彼の頭はたかぶっていた。白布で飾られた牛のひく棺は、彼に底しれぬ深い印象を与えていた。

そのとき外交部長のすぐ前の電話が鳴った。受話器を取って二言三言先方の言うのを聞いていた部長は、やにわに大声をあげて電話の相手を叱りとばした。

ものの三分もたたないうちに、ふたたび電話が鳴った。受話器を取りあげた外交部長は、またまた「ばかっ」と、編集室じゅうに響き渡るような声を出して、先方を叱りつけた。「乃木さんが自殺したというんだ。いいかげんなことをいうもんじゃないか」と、部長は、怒りのまださめやらぬ顔で、息をはずませながら言った。それっきり編集室では、学習院長陸軍大将伯爵乃木希典の自殺を問題にする者がなかった。

しかし乃木の自殺は事実であった。この夜、乃木とその夫人静子は、出棺の号砲を合図に、自邸で明治天皇に殉じたのであった。

ことが事実だとわかると、編集室はにわかに色めき

たった。編集室へは年に一度もこないような人々まで集まってきて、くわしい話を聞きたがった。「奥様もいっしょだそうだ」「何がいっしょだ」「いっしょに自殺したんだ」「では心中だな」「いや共同自殺だ」。新聞社らしいこんな軽口が飛びかうかなたでは、夕刊主任や外交部長がこぼしていた。「惜しいなあ、もっと種のないときに死んでくれりゃ、どれくらいいたすかるか知れないんだ」。職工長が来て叫んだ。「陛下の御不例以来、おちおち寝たことがないんだ」。乃木に対する同情論が、ぼつぼつ出てきたのは、そのあとのことであつた。翌朝の記事は、当時としては破天荒な四段抜きで、この事件を扱つてあつた。記事の調子はもちろん、軍神乃木をたたえることばでつらぬかれていた（生方敏郎『明治大正見聞史』）。

乃木希典の死は社会に大きな影響を与えた。元号が明治と変わる一年前に生まれ、明治とともに生きてきた夏目漱石が、作品『こゝろ』に、「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました」と、乃木の殉死をきっかけに自殺する人物を形象化したのはあまりにも有名である。その人物「先生」をして、

乃木希典と学習院



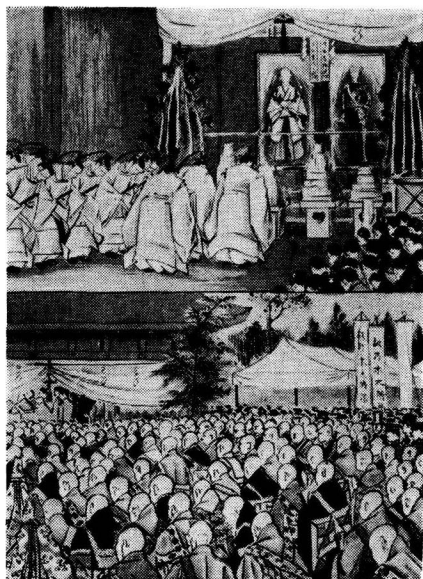
乃木希典が学習院長になつたのは、明治天皇の意向であつた。乃木は、就任すると、貴族と金持の子弟たちに、容赦なくスバルタ教育をほどこしはじめた。彼は、その「誠意過多症」的な性格のために、ちよつとしたことにも見て見ぬふりはできなかったのである。

学習院のふんいきは変わった。学生は表面上は質実剛健になつたようにみえて、その実は、ご機嫌とりがじょうずになつただけだつた。学生と寝食をともにする乃木院長をみて、「この崇高な人格の院長を戴き」と目の前でおべっかを使う教師も出た。

学生のひとりである柳宗悦は、こういう風潮に我慢がならず、同校の「輔仁会雑誌」に、「このミリタリズムを如何せん」という論文を発表した。すでに学習院を出て東京帝国大学にはいつていた武者小路実篤は、校友会で演説して、「軍人は人間の価値を知りません」と、乃木をにらみつけるようにしながら二度くりかえした。「あれは坊主か」と、乃木はあとでいったさうである（長与善郎『わが心の遍歴』より）。

漱石はいわせている。「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢遅れたといふ感じが烈しく私の胸を打ちました」。

しかし若者たちの気持はまた別であった。福井県の農村の小学生である良平のばあいも、その一つであっ



乃木大将の殉死 明治人といえども「殉死」はすでに縁遠いものであった。かつて西南の役に従軍して軍旗を奪われる失態のあったとき当然死すべき自分であったのだというのが、乃木が殉死した理由のひとつである。これを契機に森鷗外は『興津弥五右衛門の遺書』『阿部一族』など殉死をテーマに作品を描いた。絵は、大正元年の『風俗画報』より、乃木大将ならびに夫人大弔祭会（芝公園）の図。

たろう。天皇が病氣だということは、良平にも重大に思われた。しかし大人たちが、天地が暗くなつたように書きたてているのが、彼にはよくわからなかった。ことがらが天皇なのだから、それもいい。しかし「重大ではあるが、別に変つたことではないとして扱えばいい。それを、天地がひっくり返つたことのように騒ぎ立てて、その中へ良平ら子供までそのままはいつて行かねばならぬように仕向けてくる」、それが、子どもの中にはわかりかねた（中野重治『梨の花』）。

農村の少年である良平のばあい、疑問は自然発生的な素朴なものであった。しかしそれより年長の、社会にも自我にも目ざめてきた青年のばあい、疑問は鋭い批判という形をとった。明治四十五年に二十九歳となつていた志賀直哉は、大正元年九月十四日の「日記」につぎのようにしるした。

乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時「馬鹿な奴だ」といふ気が、丁度下女かなにかゝ無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じ方を感じられた。

ひとり彼ばかりでなく、友人たちも同じように「悪